

はんない

～京都:三十三間堂編～

現在、日本には数十万に及ぶ仏像がある。この数は、仏教圏の国の中でも飛び抜けている。土偶にさかのぼる偶像崇拜の文化が、日本にぴったりマッチしたのだろうと思う。しかし、その中でも、1つのお堂の中に1000体以上の仏像が安置されているのは、「三十三間堂」の本堂しかないだろう。

三十三間堂という呼び方は、通称に過ぎない。正しくは「蓮華王院」という。三十三という数字は、『法華経』などに観音菩薩が33の姿に変身して人々を救うと説かれていること由来し、この本堂の内陣の柱間（柱と柱の間）が三十三ある。長さを表す「間（けん：約1.8m）」という単位があるが、建物の長さが三十三間（約60m）ではない。実際には約120mもあり、木造建築としては世界でも一番長大らしい。

本堂の中に入ってまず目を奪われるのは、10段の階段状の仏壇に並べられた1000体の仏様である。そのため、すぐ近くにある国宝の「雷神像」は全くと言っていいほど目立たず、しかも相方の「風神像」とも引き離されるなど不遇をかこっている。そのすこぶる長大な仏壇には、1段に50体が並び、合計1000体の「千手観音立像（立っている〔重文〕）」が立ち並んでいる。



「千手」というものの、実際には一体当り42本の救いの手から成っているが、この仏壇の中だけでも4万2000本の手がひしめき合っており、ここに来れば、誰しもいずれかの手には救われるような気がする。また、「千手観音立像」は、像高が166cm前後のまさに等身大で、1000体の中には、必ず会いたい人に似た像があるとも伝えられている。しかし、それを探すためにゆっくりご尊顔を拝見することはできない。なぜなら、三十三間堂は、京都屈指の観光スポットで、外国人や修学旅行生が間断なく大挙して押し寄せてくる。したがって、堂内では人の流れに乗ってベルトコンベアのように機械的に歩くことを強制される。人の流れに逆らってじっくり千手観音を精査しようとしても、千体もあるので確実に飽きる。一体につき30秒かけるとすると、500分すなわち8時間以上もかかる。だから、本堂の中央にどっしりとお座りになっている、まわりの仏様よりも一回り大きい像高334cmの本尊の「千手観音座像（座っている〔国宝〕）」も、また、その周囲を守る「四天王像」も「二十八部衆立像」も、全てすばらしい仏像なのに、たいして見られることも拝まれることもなくなってしまい、やはり不遇をかこっている。ちなみに、これらの制作にあたったのは、当時一流と評価されていた運慶の一派が担った。



ところで、なぜこんなにも、センター争いが熾烈になるほど多くの仏像を造立する必要があったのか。俗に、「数は力なり」というが、それは政治の世界ばかりでなく、仏教の分野でも数はものを言う。お経は繰り返し唱えることによって効果を発揮する。「百万遍念仏」という言葉があるほどだ。そんな中、鎌倉新仏教の時宗の開祖一遍は、庶民に対して念仏を一遍だけ唱えるだけでも、極楽浄土に往生できるよと説いた。しかし、ご本人は、ものすごい回数にわたって念仏を唱えている。光明皇太后がつくった「百万塔陀羅尼」や念願を叶える為に神仏に100回参詣した「お百度参り」もその類いで、数が多ければ多いほど、功德も多いという発想が見え隠れする。



その功德を願ったのが、「日本国第一の犬」と評されたあの後白河法皇である。後白河法皇は、平清盛や源義仲、また頼朝や義経などの武士を手玉にとり巧みに利用しながら、その実権を維持し続けた。ある時、後白河は神秘的な体験をして、千手観音に対する信仰を深めた。そこで、清盛におねだりしたのである。平安末期、浄土信仰が浸透し、阿弥陀如来像が盛んにつくられていたのに対し、後白河が、現世利益信仰の象徴でもある観音菩薩像をねだったのは、いかにも彼らしい。しかし、美的にも、1000体の阿弥陀如来像より、1000体の千手観音像のほうが優れていると言えよう。なぜなら、「阿弥陀如来像」は、一面二臂（顔が一つに腕が二本）のごく尋常な形をしているので、たとえ1000体集めたとしても、そこに構成される空間は単調でそうおもしろくはない。それに対し、十一面千臂の「千手観音立像」は、合掌した2本の手の他に、人々を救う為の様々なアイテムを持つ40本の腕を左右に大きく伸ばして、広がりのある豊かな空間を保っている。また、頭上の10面の化仏（けぶつ）や背後の円光など、複雑なきわまりない造形が濃密な空間をつくりだしている。このお堂の中には、頭上の化仏まで含めると顔だけでも10,000以上もあり、たしかにそれだけあれば、誰かに似ている顔は確率的にあるのかもしれない。というよりも、仏像に似ている顔を、まわりから探し出した方が早いかもしれない。

最後に、弓道部諸君の為に「通し矢」について触れておこう（今回、弓道部の皆さんが不参加とは、極めて残念!）。「通し矢」とは、三十三間堂の軒下を南から北に矢を射通す競技である。一昼夜に南端から北端にまで達した矢の数を競う大矢数が有名で、1686年には、紀州藩の和佐範遠が総矢数13053本中通し矢8133本で天下一となったという記録がある。今でも毎年1月には、それにちなんだ弓道大会が開催されていますが、あなたは120mを射通すことができますか。



最後に、弓道部諸君の為に「通し矢」について触れておこう（今回、弓道部の皆さんが不参加とは、極めて残念!）。「通し矢」とは、三十三間堂の軒下を南から北に矢を射通す競技である。一昼夜に南端から北端にまで達した矢の数を競う大矢数が有名で、1686年には、紀州藩の和佐範遠が総矢数13053本中通し矢8133本で天下一となったという記録がある。今でも毎年1月には、それにちなんだ弓道大会が開催されていますが、あなたは120mを射通すことができますか。